



## まちに若い新しい 風を吹かそう

「若松さんですか。高知県奈半利町に来ていただき、講演料米一俵でまちづくりについてお話ししてくれませんか。この一本の電話が高知大学のインターンシップ制度で高知県奈半利町へ派遣されていた堀川奈津さんとの出会いでした。私も仕事柄全国各地へ講演に行くのですが、四国アイランドリーグの河村一成さんたちが始めた、一球入魂ならぬ一俵入魂のフリーズが頭を過ぎったこともあって、大学生からの依頼だし「米一俵の講演料とは面白い」と思い、一も二もなく引き受けたのです。聞けば堀川さんは、双海町出身で高知大学人文学部社会経済学科総合地域政策コースに在籍していて、私のことを子どもの頃から知っているというのです。

長年地域づくりに取り組んできた私に

とって、大学とのかかわりは大学で教鞭をとる先生たちとの交流や議論、それに先生の講演を聞く程度でそれ程多くも深くもありませんでした。

しかし、つい最近ふとしたことから地元愛媛大学のフィールドワークで「まちづくりと地域振興」の授業を担当するようになってから、大学への想いや学生に対する見方が随分変わってきたように思うのです。それは授業を通じた学生たちとの語らいの中で、地域づくりに対する夢や希望、更には活動への参加・参加・協働といった願望が随分あるにもかかわらず、大学は相変わらず机上の空論に終始し、まちづくりの現場で学生が地域の人々と触れ合う機会は皆無とってよいほどないのです。

私たちの身の回りでは、地域づくりの現場から勤労青年たちの姿が消えて久しいにも関わらず、どの地域や自治体も何の対策も打ち出せないまま苦悩しており、



堀川奈津さん

その解決策の一つとして、市民の一員である大学生を「地域の担い手とする」方法はないかと考えたその一つが、大学生を地域に派遣するインターンシップ制度です。早い大学では既にこの制度に取り組んで成果を上げているのですが、一方で様々な問題もあるようです。

堀川奈津さんの場合もそんな制度で地域に入ったようですが、期待と現実のギャップを次のように述懐しています。

「農村には若者がいないから、是非奈半利に来てほしい」私はこのような声に駆られて、05年3月から高知県東部の過疎化が進む奈半利町に住み込みで地域づくりのボランティア活動に取り組み始めた。これが私が自発的に農村に関わり始めた最初のきっかけである。

それ以来、私はこの要望に応じて3年間にわたって田植えなどの農村体験イベントを企画し、大学生が農村に足を運ぶような機会を作り続けている。その中で、多くの大学生が地元住民との交流を続けるようになっていった。

私は大学生と地元の方々との信頼関係が築ければ、地域活性化に向けた住民の意識が高まり、様々な思いが開けることを予想していた。そして、それらを協働で実行していくことによって、私が卒業する頃には主体が大学生から地元住民へシフ

トすることを期待していた。

当初は、大学生が地域に来ることは、住民にとつて非常にいいインパクトになっていた。なぜなら、今まで大学生が奈半利に来るなんて、奈半利町民は予測もしなかったからだろう。

一年経過する頃には、非日常から日常的なイベントとして定着してきていた。それを見て、私は大学生が地域に溶け込みつつある実感を持つようになっていた。しかし住民との連携は、前述した予想通りにはならなかった。大学生対象の奈半利体験イベントは一貫して大学生(私)が主体になってしまった。住民は当日のゲストという位置づけに終始してしまい、企画段階からの協働までには発展しなかった。(後略)

大学生には、単位習得という大切な仕事があります。地域の人々がいくら若いエネルギーを求めているからといって、そこには自ずから限界があることをまず考えておかないと、折角インターンシップの制度を活用しても「こんなはずではなかった」とボタンの掛け違いに気が付き、終わってしまうことだつてあるのです。地域が学生に求めるものは大きく分けて次の三つだと思われまます。

まず一つは若者のエネルギーです。地域づくりの現場は確実に高齢化していて、

考えと行動が一致せず、各種イベントもこうあるべきだ論が先行し、中々前に向いて進まないのです。インターンシップで関わった学生を中心に助っ人集団によって、熱いエネルギーと新しい風を吹かせて欲しいのです。

二つ目は若者の最も得意とする情報伝達手段の入手です。地域づくりの現場において情報の世界はこの数年格段の進歩を遂げており、チラシの折込や公共の情報媒体に頼る今までのやり方とは根本的に違つて、インターネットなどを活用した新しい情報発信能力を持たない地域は生き残れないのです。

三つ目は若者の斬新な企画力です。団体の長による形ばかり、名ばかりの実行委員会を組織して、事務局の提案したものを前提に事が運ぶ従来のやり方では、最早オンラインワンを追求して輝く地域づくりをすることは不可能なのです。

今、地域では市町村合併が進み、長年続いた画一的な地域づくりや行政依存体質からの脱皮が求められています。安心と安全に馴れた地域の人たちや行政に急激な変化や変革は望むべきもありません。大学生の清新な気力と体力、それに意欲力は過疎や高齢化などに悩む地域再生の切り札になるに違いないと思つたのです。

地方大学の地域貢献の在り方については度々議論されますが、その殆どは大学

と行政との関係に留まることが多く、学生や地域を蚊帳の外に置いての議論に終始しているような気がしてならないのです。もし、学生がインターンシップという手法で、地域づくりの新しい風を起こし地域を誘導する気概があれば「愛媛地域学」とでもいうべき理論と論理の融合が生まれ、大学の地域に果たす役割は益々大きくなり、そのことが結果的には大学の生き残りに繋がるのです。

堀川さんは、インターンシップで深く関わった経験を元に「地域の内発的発達の課題」と題して卒論にまとめ、それを具現化したり研究するため大学院に進学する事を決意し、住み慣れた奈半利町を離れ新しい活動を始めています。期待と現実の余りにも大きなギャップに翻弄されながらも、ステツプアップしようとする堀川奈津さんの行動に大きな拍手を送ります。

わが子さへ 住まない地域 住んでくれ  
虫が良過ぎる 田舎の人は

インターン 意味も分らぬ 地域人  
ぴちぴちギャルが 来ると思つて

米一俵 これで話せと 言うセリフ  
さすが高知だ いやいや嫌っ子

大学は 何するところぞ 学生に  
聞けばボケナス 遊ぶところぞ

(若松進一笑売噺より)